中部支部１０年（１９９９年５月～２００８年５月）の歩み

１．　設立の経緯

本支部は，昭和２７年（１９５２年）５月１２日に，斎藤信治愛知県工業指導所々長（当時）を発起人総代として，支部会員約１５０名により設立された．以来，すでに５６年が経過したということになる．初代支部長は小出重治名古屋大学教授（当時）である．設立当初の記事は，木材工業 7 巻 7 号（1952 年）に掲載されている．また，平成 10 年 6 月から平成 12 年 6 月までと同 16 年 11 月から 18 年 6 月まで本支部長を務められた平嶋義彦氏（現名古屋大学名誉教授）も，ご自身の調査をもとに詳細な記録を残している（本誌 53 巻 11 号 1998 年）．当初は愛知・静岡・三重・岐阜・長野の５県からスタートしたが，その後富山・石川の２県を加え，会員数では最大の支部（現時点３２０名強）となった．設立以来，施設・工場見学会，実演講演会，講演会，講習会などを精力的に行ってきた．

中部支部の事務局設置場所は永らく愛知県工業指導所（昭和２６年設置．のちに愛知県工業技術センター，愛知県産業技術研究所と改組）に置かれたが，1981 年 12 月に寺澤眞氏（現名古屋大学名誉教授）が支部長に就任して以来は，名古屋大学が一貫して事務を請け負い，また以後の支部長も名古屋大学から選出されている．　役員構成は２００８年６月現在で，支部長１名，常任理事８名（企業３名，公設試１名，大学４名），理事１７名（企業７名，公設試６名，行政３名，公益団体１名），監事２名（企業２名），顧問４名（支部長・常任理事経験者），そして幹事３名（名古屋大学職員３名）である．

２．中部支部１９９９年以降の歴代支部長

１９９８年までの支部の歴史については，平嶋義彦氏が本誌 53 巻 11 号（1998 年）に詳しく記録しているので，そちらを参照されたい．本稿では，１９９９年以降の１０年間についての歴史を補足という形で記すことにする．

当支部の総会は，慣習的には本部総会に先立って毎年６月に開かれる．その場において，理事会より新支部長を含む役員（理事，監事，顧問）および事務局員（幹事）の名簿が提案され，承認される．役員任期は支部規約により２年とされるが，支部長がやむを得ない事情によって任期途上で交代する場合は，常任理事がこれを補することになっている．支部規約に支部長の再任を妨げる条項は無いため，これまでも連続４年以上にわたるケースもあれば，逆に１年だけというケースもあった．１９９８年６月に平嶋義彦名古屋大学教授（当時）が支部長に就任して以後は，事故による例外はあったが２年の任期で交代して

いる．１９９９年以降の歴代支部長は，以下のとおりである（敬称略）．
１９９８年６月～２０００年５月　平嶋義彦（名古屋大学）
２０００年６月～２００２年５月　木村志郎（名古屋大学）
２００２年６月～２００４年５月　安田征市（名古屋大学）
２００４年６月～２００４年１１月奥山　剛（名古屋大学，２００４年１１月逝去）
２００４年１２月～２００６年５月　平嶋義彦（名古屋大学）
２００６年６月～２００８年５月　土川　覚（名古屋大学）
（２００８年６月～　　山本浩之（名古屋大学））

３．中部支部　１９９９年５月以降の活動

当支部の各年度における事業計画は，これまで総会において提案・承認されてきた．毎年春秋には講演会あるいは見学会を開催し，隔年で接着講習会（本部からの委託），また不定期に切削講習会（本部委託事業）を実施してきた．１９９９年５月以降に実施された講演会を以下に記す（演者の敬称は略した）．
［支部講演会］
１９９９年５月　講演会（名古屋市工業研究所）
高圧水蒸気による木材の圧縮成型加工　　棚橋光彦（岐阜大学）
近赤外分光法による木材の非破壊計測　　土川　覚（名古屋大学）
２０００年１１月　講演会（ホテル・ルブラ王山）
産婦人科医の目から見た木造建築　　吉村正（産婦人科医師）
棟梁の目から見た木造建築　　石原良三（石原建築）
２００１年５月　講演会　（名古屋市工業研究所）
木材工業における非破壊検査の展望　祖父江信夫（静岡大学）
細胞レベルでの木材の変形・破壊とアコウスティックエミッション　　安藤幸世（名古屋大学）
２００２年５月　講演会（木材会館）
光・熱を利用した木材の着色技術　　三井勝也（岐阜県生活技術研究所）
２００３年８月　講演会およびシンポジウム　（天竜市民ホール壬生）
地域の林業活性化と木材利用　　熊崎実（岐阜県森林アカデミー）
コーディネーター　　祖父江信夫（静大）
パネリスト　　水野一男（あいちの木で家を造る会）ほか
２００３年５月　講演会（木材会館）
都市型木質系廃材の処理とリサイクル　　水谷　武（名古屋港木材倉庫）
木質系廃材の炭化とその用途開発　　加藤久義（山久化学）
２００３年１０月～１１月　第３６回名古屋国際木工機械展でのパネルディスカッション

（ポートメッセなごや）
スギを含めた人工林―生産流通現場からの最新情報の交換
コーディネーター　　奥山　剛　（名古屋大学）
パネリスト　　神谷典明　（マシキジャパン）ほか
２００４年５月　講演会（名古屋木材会館）
金属並びにプラスチックに取って代わる木質系材料　　金山公三（産総研中部センター）
木質系グリーンポリマーの開発　　高須恭夫（愛知県産業技術研究所）
２００５年５月　講演会（名古屋市工業研究所）
木質バイオマス発電の現状と課題　熊崎　実　　（岐阜県立森林文化アカデミー）
森林資源の新しい展開～森林を起点とする持続的工業ネットワークの構築～　　舩岡正光
（三重大学）
２００６年５月　講演会　（名古屋市工業研究所）
木造建築の過去、現在そして未来　　平嶋義彦氏　（名古屋大学）
杉材を活用した古い建築、そして新しい建築技術　　片岡靖男氏　（中部大学）
２００６年１０月　第１回ウッドグッドイブニングセミナー（野依記念学術交流館）
木材産業の現状と明日への展開　　細貝一則（全国木材組合連合会）
２００７年５月　第１回ウッドグッドイブニングセミナー（野依記念学術交流館）
創業３２０年　継続の秘訣　　鈴木龍一郎（材摠木材）
２００７年１１月　第３８回名古屋国際木工機械展での講演会（ポートメッセなごや）
「バイオエタノール」って何？～バイオ燃料生産の現状と展望～
井上雅文　（東京大学）
木材からのバイオ燃料　　坂　志朗　（京都大学）
木質バイオマスの長所と短所　　福島和彦　（名古屋大学）
２００８年５月　第１回ウッドグッドイブニングセミナー（野依記念学術交流館）
わが社のちょっぴり自慢話を　　服部行男　（名南製作所）
［主な共催シンポジウム］
２００５年１１月　木材学会創立５０周年記念シンポジウム（ポートメッセなごや）
環境共生社会に向けての木づかい―エコロジーとエコノミーとの接点を探る
コーディネーター　　平嶋義彦　（名古屋大学）
パネリスト　　井上篤博　（セイホク）　他４名
２００４年１０月　第２２回木材加工技術協会年次大会特別講演会
林業経営者からみる林業と木材工業のあるべき姿　　速水　亨　（速水林業）
木材工業からみた国産材利用　　笠木和雄　（名古屋木材）
［講習会］
木材接着講習会（本部主催事業，全国数会場）をほぼ隔年で開催してきたほか，不定期に切削講習会（本部主催事業，全国で１会場のみ）を引き受けてきた．最近１０年におけ

る名古屋での接着講習会の開催は，以下のとおりである．１９９８年１月（名古屋市工業研究所），１９９９年２月（名古屋市工業研究所），２００１年１月（ホテルルブラ王山），２００３年１月（ホテルルブラ王山），２００４年７月（ホテルルブラ王山），２００６年７月（名古屋市工業研究所），２００８年７月（名古屋市工業研究所）．切削講習会の開催は，２００１年１０月（名古屋木材会館）および２００５年１０月木材切削講習会（名古屋木材会館）に行われた．

―――――― 一行あける ――――――

以上，ここ１０年間における中部支部の活動を概観した．当支部の講演会で取り上げられる話題は，１９８９年以前では素材の加工技術や木工機械，あるいはインテリアに関するものが多く，１９８９年からの１０年では，熱帯資源の利用や居住性にするものが目立った．さらに最近１０年（１９９９年以後）では地域林業との関連性やリサイクル，さらにはバイオマス利用など地球環境問題を切り口とする話題が増えてきた．これらの動向は，木材産業を取り巻いている世情を完全に反映している．

なお“ウッドグッドイブニングセミナー”は，中部地区の木材工業の振興と相互交流を目的として，２００６年度から始められた新たな試みである．同セミナーでは，斯界の専門家に最新の話題を提供して頂き，講演終了後は懇親会を持ち支部会員相互の情報交換を行う．これまでに３回ほど実施したが，今後も継続し支部会員の方々にアップトゥーデートな話題と情報交換の場を提供して行きたい．

４．今後の展望

我が国の経済構造は，世界経済のグローバル化と官民の構造改革の急速な進展によって，まさに歴史的再編を迎えている．出口の見えない長期不況は，木材業界においても極めて深刻であり，住宅着工数の落ち込み，原料価格の低迷，外材および外材製品の輸入圧の増大，急速なＩＴ化への立ち遅れなど，状況は厳しいままに置かれている．一方で，地球環境汚染や資源枯渇に対する危機意識の高まりから，森林と木材によせる市民の期待が急速に高揚しつつある．木材産業にとってはまさに追い風であり，これを生かさない手はない．２００５年に愛知万博（愛・地球博）が開催され，中部地方の企業を中心に，多数の木材関連企業が運営に関わった．また，隔年ではあるが国際木工機械展が名古屋の地で開催されており，これまでにも産官学各界すべてから積極的な参加がなされてきた．時世的に世代交代が進みつつあるためなのか，各界において比較的若い指導者が育ってきており，様々な研究会やサークルが自主的に生まれつつある．彼らのポテンシャルを利用しつつ，産官学一体でこれをいかに伸ばして行くかが支部発展の鍵であり，ひいては中部木材工業界の発展につながるものと自覚している．